The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本基督教団の戦前・戦後史 : 教団合同・戦争責任・万博問題を中心に
Author(s)	川口, 葉子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55703
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　川口　葉子　　）	
論文題名	日本基督教団の戦前・戦後史 ―教団合同・戦争責任・万博問題を中心に―

本研究は、アジア・太平洋戦争下から戦後における日本基督教団（以下、教団）が社会的なものとの結びつきのなかで、どのような展開のプロセスを辿ってきたのかに関する研究である。1940年代から1970年代まで教団を対象とし、教団が戦時期・戦後を通して社会的・政治的なものとどのような関係を結んできたのか、そしてそれによってどのように自己形成してきたのかに注目し、戦後日本におけるキリスト教の展開として明らかにする。そのために教団合同・戦争責任・万博問題という三つの問題を設定し、文化的・思想的問題として論じる。

宗教団体法によって戦時体制のなかに成立した教団は、敗戦を経て、1960年代末からはじまる教団紛争と呼ばれる混乱期へと進んでいくことになる。混乱の根底には、社会的活動をどのように位置づけ対処していくかという問いがあり、教団の歴史をキリスト教の展開過程として捉えるときに、戦前・戦後の教団の展開には、社会的・政治的なものとの関わりがひとつの役割を果たしていた。それを踏まえ、本研究では、社会的・政治的なものとの関係性という論点において、戦前・戦後のキリスト教を問題化する。

第一章では、アジア・太平洋戦争下における教団合同が戦時体制のもとで行なわれたこととともに、「日本基督教」によって組織的・信仰的統制が確立し、戦争動員が果たされてきたことを論じた。特に伝道活動に注目するときに、「日本基督教」によってキリスト教信仰に基づいた戦争動員が生み出され、国策を果たすためのキリスト教として機能することが可能になったことが明らかになる。そのように総力戦体制の一員としての働きを担うものとして、教団は戦時体制のもとで教団成立を果たしたことを見ることができる。

第二章では、敗戦を迎えた教団が、キリスト教ブームや占領政策といった社会的状況において、戦後の再編をどのように経験したかを検討した。戦争協力を通して国に奉ずる意識は、敗戦を経てかたちを変えて継続し、1950年代も国家に有用なものとしての倫理的側面に重点が置かれた伝道活動が展開された。しかし1960年代に入ると、世界的な神学の転換を背景に、教団は社会に対する認識を新たにしていくようになる。それは、キリスト教のなかに「この世」が組み入れられていった過程であり、のちに教団紛争の素地となっていくことになる。

第三章では、1960年代末から教団の分断が生み出されてきたことを検討したが、その一要因として、教団においてアジア・太平洋戦争の経験が語られたことに注目した。最も重要な契機が1967年に教団議長名で発表された「戦争責任告白」であり、それによってキリスト教としての本質主義的議論と根源的な教団批判が生み出されるようになる。キリスト教の本質主義的議論とは、戦争協力によってはキリスト教の信仰的な正当性が揺るがされることのないことを主張するものであり、信仰的規範に基づくキリスト教の「本質」を設定したうえで、教会の活動を「本質」とそれ以外とに分断するものである。正しい福音宣教、正しい聖礼典が「本質」とされ、「真の主の教会」という領域を設定することは、同時に排除の機制を生み出していくことである。その一方で生み出された教団に対する根源的な批判とは、「本質」を守ろうとして外部化された問題をキリスト教のうちに包摂することによって、キリスト教を問い直そうとする方向性である。

戦争をめぐる語りのなかで生み出されてきたそれらの議論は、その後キリスト教館の出展問題へと展開し、万博問題を政治的なものとして外部化し、キリスト教に対する純粋性を確保することで、出展の推進へとつながる道筋をつくることになった。キリスト教館出展問題では、キリスト教館をキリスト教の「本質」に関わらない政治的なものとして外部化することによる推進運動と、出展をキリスト教の課題として受け取ることによるキリスト教の問い直しへと進み、対立が深まることになる。

第四章では、万国博覧会にパビリオンとして出展されたキリスト教館、またそれへの対抗として出展された反博キリスト教館の検討を通して、分断された教団のうちにあって、それぞれのキリスト教が政治性と結びついていく出来事として焦点を当てた。万博を政治性という観点において捉えるときに、キリスト教館がその演出や広告代理店を通して、パビリオンとして要請される役割を果たすことによって、万国博の政治性のなかに規定されるものとなったことを論じた。一方、反万博・反戦と結びつく立場を選び取った反博キリスト教館は、それを通して市民のなかに存在するキリスト教としての試みとして理解できるものである。それらは、万博・反博それぞれにキリスト教としての意

義付けがなされながらも、それがどのような政治性と結びついたことなのかを問う必要があることを示すものである。

第五章では、教団の分断としての教団紛争を神学に注目して検討した。教団紛争をそれまでの神学の知が切り崩されていく過程として捉え、「情況」をひとつの視座に置くことで既存の神学の枠組みが問い直され、新たな神学的思想が提示される過程として検討した。教団紛争は、それまでの神学が体制の論理のイデオロギー性を欺瞞的に覆い隠してきたとして、既存のキリスト教・神学が徹底的に批判され問い直された出来事であったが、そのために役割が与えられたものが人間イエスの表象であり、パウロ主義批判であった。人間イエスは紛争のなかで既存のキリスト教を問い直す役割を負わされ、パウロを土台に形成されたキリスト教への批判として展開し、神学思想総体のもつ構造の分析を問題にすることへと向かっていくものであった。「情況」をひとつの視座に置くことで、「キリスト教」と「この世」を区別する信仰のあり方を問うものとして展開し、キリスト教や福音の内実を問うものとなった。

以上を踏まえ、本研究はアジア・太平洋戦争下において合同した教団を基点とし、戦前・戦後の社会的状況において、教団が社会的・政治的なものとの関係性をどのように取りもってきたかを明らかにした。それは、教団が社会的なものとの関係性が問われるなかで成立し、展開してきたことであり、その関わりのなかで教団・キリスト教としてのあり方が規定されてきたことである。それはまた、キリスト教が自己充足的なものとして存立してきたのではなく、社会的なものとの関わりで現象するものであったことを明らかにすることでもある。

教団におけるその関わりのあり方は様々な様相をもち、戦時下のような国家主義体制における成立という社会的状況に規定されたものとして、また国家社会に対して役割を果たそうとする親和的な関わりや、その後の学生運動と結びついた体制批判など、教団は様々なあり方で社会的・政治的なものと関わりをもってきた。

それらを通して見ることができることは、社会的なものに対する包摂と排除のプロセスであり、その機制によってキリスト教としてのあり方が選び取られてきたことである。教団紛争は、それがもっともあらわにされた出来事として捉えることができる。

教団にとって社会的なものを排除する機制となったのは、キリスト教の本質主義的議論であり、それによって教団の分断が生み出され、キリスト教の「本質」を設定することによって、戦争の経験や万博問題を社会的なものとして外部化・除外し、キリスト教の純粋性を主張する議論として展開していった。

一方、「本質」から切り捨てられていったものをもう一度キリスト教のなかに包摂し、捉え返すことが、教団・キリスト教に対して問いを生じさせるものとなった。それらは「キリスト教」と「この世」という二元的思考ではなく、それらを区別する信仰のあり方を問うものとして展開するものであった。キリスト教から外部化され、社会的なものとして排除されていたものによって、キリスト教を問い返すものであり、それによってキリスト教としての枠組みが問われるものであった。

社会的なものが教団によってキリスト教の「本質」から切り捨てられるものとしてあった一方で、しかしそれによって教団が問われていくという再帰的なプロセスが常にそこにあったのであり、このような絶えざる批判と反批判の過程こそが、教団の存在意義であるといえるだろう。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　川口　葉子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	川村邦光
	副 査　大阪大学　教授	杉原　達
	副 査　大阪大学　准教授	北村　毅

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：日本基督教団の戦前・戦後史
―教団合同・戦争責任・万博問題を中心に―

学位申請者　川口葉子

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　　川村邦光
副査　大阪大学教授　　杉原　達
副査　大阪大学准教授　北村　毅

【論文内容の要旨】

本論文では、日本基督教団（以下、教団と略）の戦前・戦後史、特にアジア・太平洋戦争下での 1941 年のプロテスタント 30 余派の合同と「日本基督教」の形成、教団の敗戦後と戦争責任告白、1960 年代末からの万博問題と教団内の抗争に論点を絞って、教団史ひいては日本キリスト教史の問題性を明らかにして再検討し、社会的な関係性を問うなかから日本キリスト教史の深化を目指そうとしている。

序論では、教団史および日本キリスト教史に関わる先行研究を批判的に検討して、問題の所在を明らかにし、問題を設定する。全体の議論では、アジア・太平洋戦争との社会的・政治的な関係性において歴史化していく視点を一貫して重視し、教団の歴史的な展開を戦争経験に関する記述や語りのもとで探究することを課題とする。

第一章では、戦時体制の中で教団が結成され、国策に奉仕し戦争協力する「日本基督教」が形成され、教団内の信仰統制を強化して、帝国臣民として積極的に国策を担う戦争動員の機能を果たしたことを明らかにする。第二章では、敗戦後、教団が社会に対してどのような関わりをもち、どのように展開してきたかを検討する。1950 年代では国家に対する役割意識を継続してもつが、1960 年代に入ると、世界的な神学の転換を背景にして、「この世」での社会的活動が信仰のなかに位置づけられ、社会との関係のあり方が問われていく時期であり、そこから教団紛争の素地を生み出すことになったことを論じる。

第三章では、教団におけるアジア・太平洋戦争の経験が語られ、戦争責任告白を契機として、キリスト教としての本質主義的議論と根源的な教団批判が生み出され、戦争の問題を外部のものとして切り捨てていく方向性と、その問題を包摂することによってキリスト教を問い直そうとする方向性が対立を深化させていったことを考察する。第四章では、万国博覧会にパビリオンとして出展されたキリスト教館の検討を通して、キリスト教館が万国博の政治性の中に規定される存在であったことを検討する。他方、反博キリスト教館は反戦と結びつき、キリスト教の政治性を徹底して批判する運動へと展開して、教団紛争を激化させていったことを明らかにしている。第五章では、教団紛争の中で北森嘉蔵の「神

の痛みの神学」が戦後教団の神学的・思想的支柱となり、現状肯定の論理として機能して体制補完のイデオロギーの役割を果たしたと批判されて問い直され、イエスを史的・実存的に捉えていく議論、また観念と現実を逆転させた体制擁護のキリスト教を根底から問うパウロ主義批判が展開されて、新たな神学的思想が提示されたことを考察する。終章では、全体をまとめて、キリスト教と「この世」社会のあり方に対する絶えざる問題提起こそ、教団の歴史的展開の動因になっていることを指摘して締め括っている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、日本基督教団による正史といえる教団史ひいては日本キリスト教史における問題性を批判的に検討して、教団の社会的・政治的な関係性を問うなかから、教団史の再構築を目指していている意欲的なものである。教団の形成、教団の戦争責任告白、万博問題による教団内の抗争、以上が主要な論点となっている。この三論点に関しては、教団でもいまだ決着のついていないものであり、日本キリスト教史研究において鋭く問題提起をしている意欲的なものであると考える。以下、本論文で評価できる点を挙げてみよう。

第一に、全体的に概観して述べると、本論文では教団が社会的なもののなかで問われることで成立し展開してきたことする視点から、教団におけるキリスト教が内面的に自己充足的なものとして存立してきたのではなく、社会的・政治的な事態ないし状況との関係性のなかで生成・展開してきたことを、重要かつ具体的な事件もしくは出来事を通じて明らかにしていることである。

第二に、この論文で主要な論点になっている、教団の形成、教団の戦争責任告白、万博問題による教団内の抗争、戦前・戦中における国家そして戦争との関わり、敗戦後での戦争責任を介した国家・社会との関わり、以上の２点を問題視し、教団内抗争へと発展した大阪万博、いずれに関しても教団のキリスト教神学と密接に関連させながら、教団の社会的および政治的な姿勢を教団内外の多くの資料を用いてところは評価できる。

第三に、教団内の抗争を分析する際に、まずは教会派と社会派のいずれかに偏った論述をすることなく、詳しく両派の見解を丁寧に記したうえで、批判的な見解を述べていくという構成をしているところは学術的な姿勢として評価できる。その際には、自分の立場をある程度ははっきりさせる必要もあろう。戦中から戦後、1970 年代前半まで教団の中心的な神学となっていた北森嘉蔵の「神の痛みの神学」、またそれに対する批判、そして社会派の人間イエス論・パウロ主義批判に関して、当時の文献を用いて、問題点を丁寧に整理しながら、当時のキリスト教・神学の思想史的な展開を明らかにしている。

1960 年代にカトリックでは解放の神学が唱えられ、南米などのカトリック国における被抑圧者の解放闘争を推し進めていったが、日本のキリスト教界にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。本論文で記されている社会派・造反派の神学における人間イエス論に関しても解放の神学の影響があったことに関して論及することが必要だった。特に東京神学大学での闘争は大学当局ばかりでなく、教団批判を徹底して行ない、教会派と社会派の亀裂を深めて今日まで継続させたものであり、紙幅を割いて論じてほしかった。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。